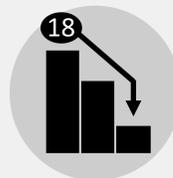


## 短大を取り巻く環境



第4次産業革命  
Society 5.0



18歳人口の減少  
H27:120万  
→H45:100万人



首都圏定員抑制  
地域振興



学び直し  
生涯学習

## 短大の特徴



アクセス  
女性・地域・社会人



ニーズ  
幼保・看護・介護・栄養



地域貢献  
高い地元就職率



ファーストステージ  
編入学・専攻科の強化



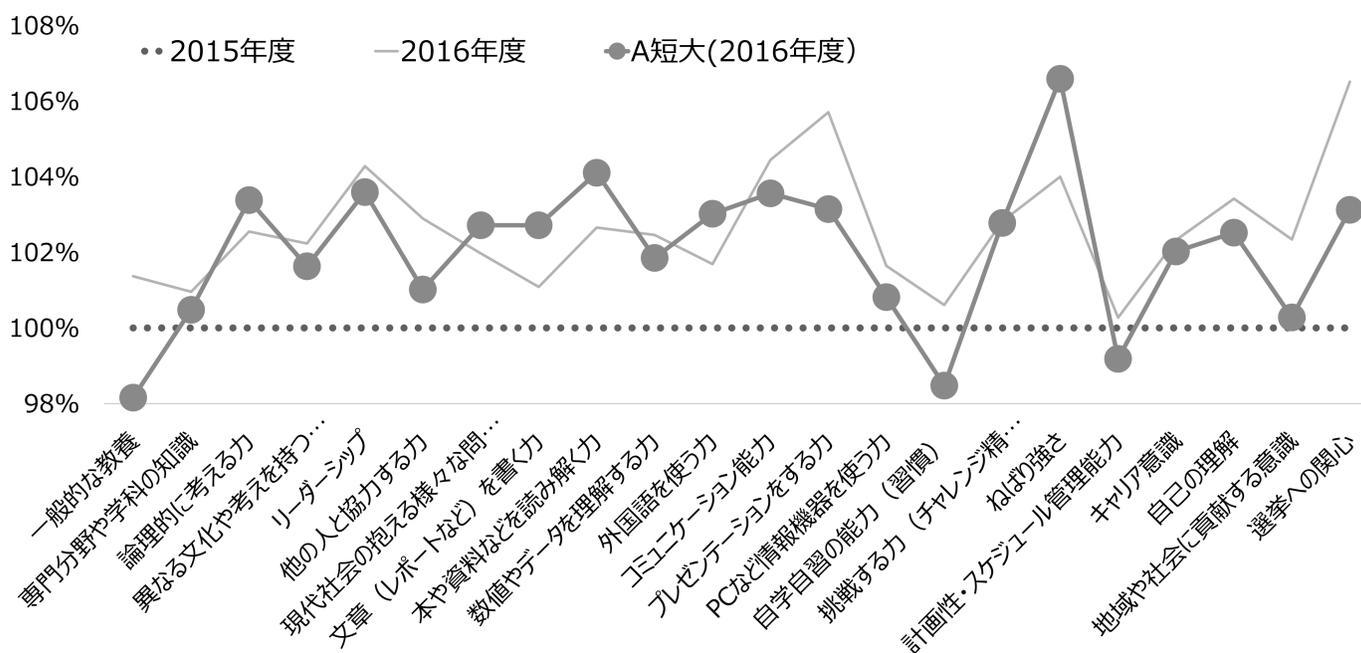
分析対象

調査実施母体：短期大学基準協会  
 調査名称：短大生調査（Tandaiseichosa）  
 使用年度：2015年度及び2016年度の結果  
 2015年度：総参加校59校、総参加人数18,532人  
 2016年度：総参加校57校、総参加人数17,703人

対象：2015年・2016年共に  
 参加した短期大学35校  
 学生数：5,822名（2015）  
 5,537名（2016）

対象の範囲：

2015年度	2016年度
1年生	2年生
1年生	2年生



### ◎ 学修成果の2か年分のベンチマーク

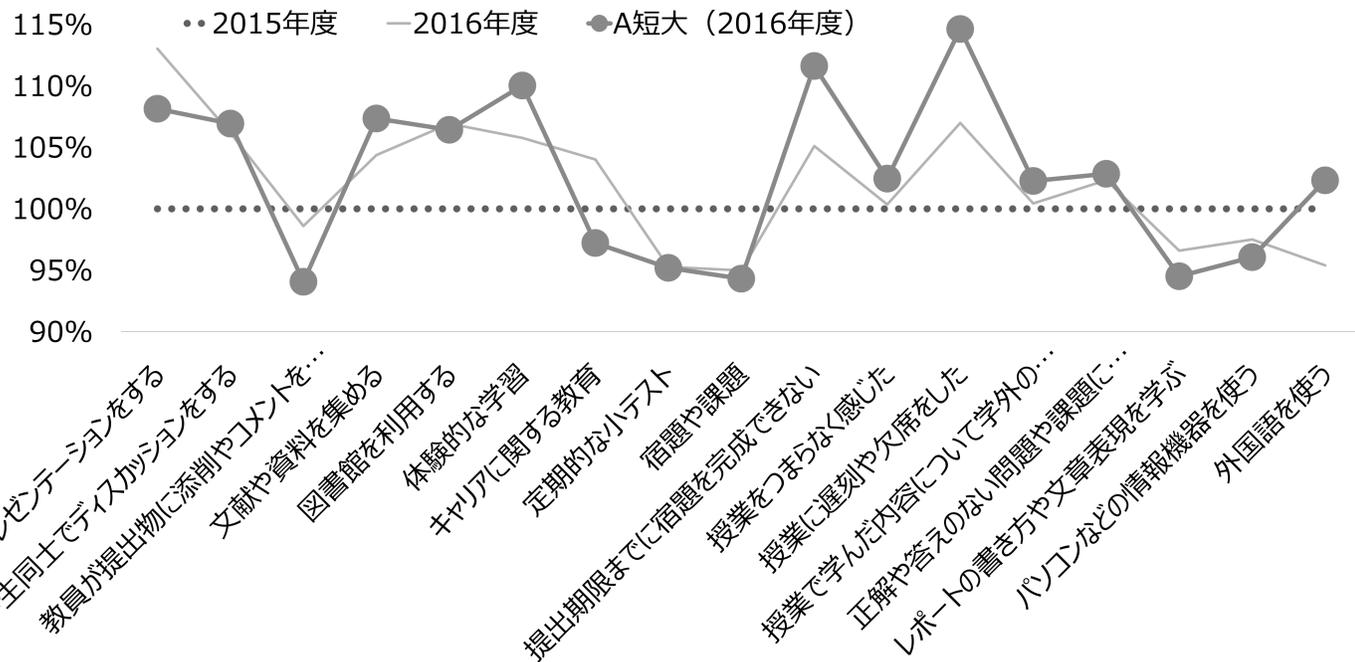
(2015年度結果（全体とA短大）を100%として上昇率比較）

- ✓ 2015-2016年度（全体）をみると、2年生のときの方が評価が上がる傾向がある（学年効果）
- ✓ A短大の2か年比較をみると、「一般的な教養」「自学自習」「計画性」などが2年生の方が評価が低くなっている
- ✓ 全体とA短大を比較すると、A短大の短大生は汎用的技能は伸びを感じる一方で、コミュニケーション能力はやや伸びを感じていない傾向にある

### ◎ 学修経験の2か年分のベンチマーク

(2015年度結果（全体とA短大）を100%として上昇率比較）

- ☆ 2015-2016年度（全体）をみると、2年生の時の方がプレゼンテーションやディスカッションといったアクティブ・ラーニングや文献収集、図書館利用などの学修行動が増加している
- ☆ 全体と同様に、A短大もアクティブ・ラーニングといった学修は多くなっているが、授業に対して退屈を感じ、遅刻・欠席が多くなっている
- ☆ 全体とA短大を比較すると、A短大の短大生の教員からのフィードバックは、全体結果よりも減少率が高く、授業を敬遠する割合も多くなっている。



- ・2か年の同一の学生集団の結果の比較を通して、全体の傾向と個別短大の傾向を見ることに一定の効果ある  
 → 同一集団の変化を追うことで教育改善につなげる
  - ・在学生の2か年の変化では、成果をとらえられない可能性もある  
 → 就職後の動向や在学時の教育成果の実感なども含め、評価改善につなげる必要性
- ◎ 在学時と卒業後を一体として、短大教育の質をどう保証するか

